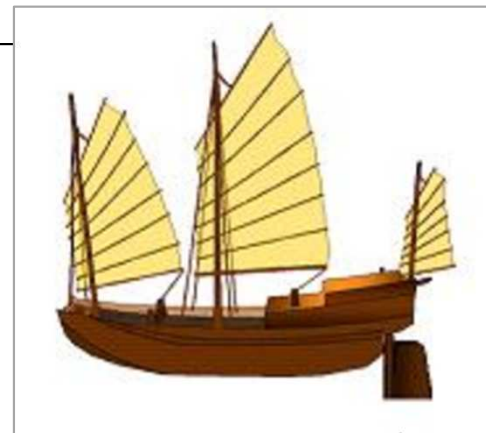


「邪馬台国の探し方」

(距離・方位だけでない探究の要件)



2022年10月20日
日本橋社会教育会館にて
丸地 三郎

「邪馬台国の探し方」

- ✓ 距離・方位で邪馬台国を、300年、探してきたが、見つからない。
 - 何を考慮しなければいけないのか？
 - どんな要件を満たしたら、その位置が目的地と認められるのか。

- 探し出すための要件の検討

1. 魏志倭人伝とそれ以降の中国史書の倭人伝/倭国伝の取り扱い。
(魏志倭人伝と同等に扱ってよいのか？)
(歴史研究の基本:「史料批判」=史料の検証の重要性を改めて考えます。)
2. 魏志倭人伝を正しく理解するのに欠かせないのが、魏の外交情勢
3. 魏が送った公式使節の規模・人員・目的と、受け入れた倭国側の対応・姿勢
4. 魏の使節の使用した船舶と「船と航海の常識」
5. 「王宮に行かず、王に面会しなかった」論…… 有り得るのか？
6. 古地図の検討 (現代の地図と古代の地形は違う)

- 課題

- 九州上陸地点は何処か？

魏志倭人伝 と それ以降の倭人伝・倭国伝

- 魏志倭人伝の評価が高い理由は
 - ① 魏の公式の使節が訪問し、その報告書をもとに記述された。
 - ② 専門知識を持った植物・動物・地理・社会学などのプロを同行させ組織的な訪問記録とみられる事。
 - ③ 更に、複数年、倭国に滞在した帯方郡の張政の報告書も、記述の裏付けとなっている。
- 呉との最終抗争の中で、外交戦略上、倭国の情報を必要としていた魏の国策がそのバックにある。
- 魏志(三国志)後の倭人伝・倭国伝(後漢書・梁書・隋書・北史など)は、何に基づいて記述されたか？
 - 後漢書の場合、新たな有力な日本情報は無かったと推察する。
 - 倭国乱の時期を桓・靈の間(146年 - 189年)と具体的に記述しているが、情報の入手先は疑問で、陳寿の不採用とした史料を見たのか、著者の単なる推察なのかも不明。信頼性は無い。
 - 梁書は、魏志・後漢書の引き写しと思われるが不正確。誤字多し。中国を訪問した倭の五王・遣隋使の情報はあっても限定的。追加された情報は、猟奇的な内容を含み信頼性無し。
 - 隋書は、魏志(三国志)・後漢書を参照したのは明らかだが、中国の未開地に対する偏見をそのまま記述し、信頼性は無い。
- 三国志(魏志倭人伝)以降の中国史書の邪馬台国に関する記述には、信頼性が無く、魏志倭人伝と異なる情報が記された場合には、その情報は信頼できない。
 - 「魏志倭人伝と異なる情報」を根拠にする場合には、別途、情報の信頼性を評価が必要。『史料批判』
- 裴松之(372年 - 451年)の注釈も、同様なことが言える。
 - (魏略曰 其俗不知正歳四節 但計春耕秋収 為年紀)「魏略いわく、その習俗では正月(陰暦)や四節を知らない。ただ春に耕し、秋に収穫したことを数えて年紀としている。」
 - これも「中国の未開地に対する偏見」で、陳寿の採用しなかった文言を、魚豢(魏略の著者)の著書の中から捜したものか？

5 『梁書』倭国伝 <http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kanbun/kanbun-mokuji.htm> 中国史籍訳文から引用

倭者、自云太伯之後。俗皆文身。去帶方萬二千餘里、大抵在會稽之東、相去絶遠。

倭とは、自らは太伯の後裔だという。俗は皆、身体に刺青をする。帯方郡から一万二千余里、おおよそ会稽郡の東に在り、互いに絶海の遠方である。

対馬が無い

未盧国とは違う

從帶方至倭、循海水行、歴韓國、乍東乍南、七千餘里始度一海。海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名未盧國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南行百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月日、至邪馬臺國、即倭王所居。其官有伊支馬、次曰彌馬獲支、次曰奴往鞮。

帯方郡から倭に行くには、海を巡って韓国を経て、東へ南へと航行すること七千余里で、初めて一海を渡る。海の広さは千余里、名は瀚海、「一支国」に至る。また一海を渡ること千余里、名は「未盧国」。また東南に陸行すること五百里、「伊都国」に至る。また東南に行くこと百里、「奴国」に至る。また東に行くこと百里、「不彌国」に至る。また南に水行すること二十日、「投馬国」に至る。また南に水行すること十日、陸行すること一カ月で、「邪馬臺国」に至る。すなわち倭王が居する所である。その官には伊支馬があり、次は彌馬獲支といい、次は奴往鞮という。

民種禾稻紵麻、蠶桑織績。有薑、桂、橘、椒、蘇。出黑雉、真珠、青玉。有獸如牛、名山鼠。又有大蛇吞此獸。蛇皮堅不可斫、其上有孔、乍開乍閉、時或有光、射之中、蛇則死矣。

民は水稻や紵麻の種をまき、養蚕して絹織物を紡ぐ。薑、桂、橘、椒、蘇がある。黒雉、真珠、青玉を産出する。牛のような獣がおりる、名は山鼠。また、この獣を呑み込むという大蛇がいる。その蛇皮は堅くて叩き切れないが、頭上に孔があり、開いたり閉じたりして、時には光を発するのだが、この中を射れば、蛇は死ぬ。

物産略與儋耳、朱崖同。地温暖、風俗不淫。男女皆露紵。富貴者以錦繡雜采為帽、似中國胡公頭。食飲用籩豆。其死、有棺無槨、封土作家。

物産はほぼ儋耳、朱崖と同じ。土地は温暖、風俗は淫ではない。男女は皆、頭に何も被らない。富貴な者は錦に彩色の刺繡をして帽子とし、中国の胡族の頭装に似ている。飲食には御膳を用いる。その死者の埋葬には棺はあるが槨はなく、土を封じて塚とする

空想の産物？

別の民族では？

人性皆嗜酒。俗不知正歳、多壽考、多至八九十、或至百歳。其俗女多男少、貴者至四五妻、賤者猶兩三妻。婦人無姪妒。無盜竊、少諍訟。若犯法、輕者沒其妻子、重則滅其宗族。

人の性は皆、酒を嗜む。俗は歴を知らず、長寿が多く、多くは八～九十歳、あるいは百歳になる。

その風俗では女が多く男が少ないので、貴者は四～五妻、賤者でも二～三人の妻がいる。婦人は嫉妬せず。盗難もなく、諍訟は少ない。もし法を犯せば、軽い罪なら妻子の没収、重い罪ならその宗族を滅ぼす。

一夫多妻の理由が具体的に記され、説得力があるが、独自に追記したものでは？

漢靈帝光和中、倭國亂、相攻伐歴年、乃共立一女子卑彌呼為王。彌呼無夫婿、挾鬼道、能惑衆、故國人立之 有男弟佐治國。自為王、少有見者、以婢千人自侍、唯使一男子出入傳教令。所處宮室、常有兵守衛。

漢の靈帝の光和中(178-184年)、倭国は乱れ、何年も戦いを続けたので、卑彌呼という一人の女性を共立して王とした。彌呼には夫婿はなく、鬼道を身につけ、よく衆を惑わすので、国人はこれを立てた。国政を補佐する弟がいる。王となってより会った者は少ない、千人の婢が側に侍り、ただ一人の男子に教令の伝達のため出入させている。暮らしている宮殿には常に兵がいて守衛している。

後漢書の「桓靈間」より年代が具体的に判り説得力があるが、独自意見では？

至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢、魏以為親魏王、假金印紫綬。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與為王。 其後復立男王、並受中國爵命。

魏の景初三年(239年)、公孫淵が誅殺された後、卑彌呼は初めて遣使を以て朝貢し、魏は親魏王と為し、仮の金印紫綬を授けた。

正始中(240-249年)、卑彌呼が死に、改めて男の王を立てたが、国中が服さず、互いに誅殺しあったので、再び卑彌呼の宗女「臺與」を王として立てた。

その後、また男の王が立った、いずれも中国の爵命を拝受した。

時間軸がそろい、理由も判り、明瞭な記述だが、独自意見では？

得意げな注釈

- 著者の想像を交えた変更を加えた全く信頼性の無い『非一級歴史書』。

『北史』倭国伝

倭國在百濟新羅東南、水陸三千里、於大海中、依山島而居。魏時譯通中國三十餘國、皆稱子。夷人不知里數、但計以日、其國境東西五月行、南北三月行、各至於海。其地勢東高西下、居於邪摩堆、則魏志所謂邪馬臺者也。

倭国は百濟・新羅の東南の水陸3千里の大海の中にある。魏の時代に往来する国が三十数ヶ国あった。倭人は野蛮人で距離を測る里数と云う単位を知らず、日数で計測する。国境は東西で五ヶ月、南北で三ヶ月で各々海に至る。地勢は東に高く、西に低い。ヤマイ即ち魏志の云う邪馬台である。(丸地記、以降も同じ)

又云、去樂浪郡境及帯方郡、並一萬二千里、在會稽東、與儋耳相近。俗皆文身、自云太伯之後。計從帯方至倭國、循海水行、歷朝鮮國、乍南乍東、七千餘里、始度一海、又南千餘里度一海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名末盧國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月、至邪馬臺國。即倭王所都。

又、樂浪郡の境及び帯方郡から一万二千里と云い、會稽の東にあり、儋耳に近い。習俗としては、皆入墨があり、太伯の子孫と云う。帯方郡から倭国へ行くには、海をめぐり行き、朝鮮国を経て、南へ東へ沿岸を進み七千里。始めて大海を渡り、又南へ大海を千里渡る、名付けて瀚海と云い、壹岐国に至る。又、海を千里渡り末盧国と称す。東南へ陸行五百里で伊都国、東南に百里奴国に至る。東へ百里で不彌国に至る。又、南へ水行二十日投馬国に至る。又、南へ水行十日と陸行一月で邪馬台国に至る。即ち、倭王の都とする所。

漢光武時、遣使入朝、自稱大夫。安帝時又遣朝貢、謂之倭奴國。靈帝光和中、其國亂、遞相攻伐、歷年無王。有女子名卑彌呼、能以鬼道惑衆、國人共立爲王。無夫有二男子、給王飲食、通傳言語。其王有宮室樓觀城柵、皆持兵守衛。爲法甚嚴。

漢の光武の時、使節として入朝する者は大夫と自称した。安帝の時に又倭奴國と云う国名で朝貢が行われた。靈帝の光和年間に、その国は乱れ、相互に攻め、何年も王が居なかった。卑彌呼と云う女性が居て、鬼道によって民衆を惑わす。倭国の人々は、共に、この人を王とした。夫は無く、男子二人が王に食事を持ち、言葉を伝えた。その王宮には物見やぐら、城柵があり、皆、武器をもち守衛する。法律を厳重に守る。

魏景初三年、公孫文懿誅後、卑彌呼、始遣使朝貢、魏主假金印紫綬。

魏の景初三年に公孫淵文懿が攻め殺された後に、卑彌呼は始めて、朝貢の遣使を送り、魏主は金印紫綬を授けた。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與爲王、

正始年間に、卑彌呼は死に、男王が立ったが國中が従わず、更にお互いに誅殺する。再び、卑彌呼の宗女の臺與を立て王とした。

- 北史倭国伝は、南北朝時代(439年 - 589年)の北朝にあたる王朝、北魏・西魏・東魏・北齊・北周・隋の歴史を記している。李大師とその子の李延寿が書き、659年完成か。(梁書の完成629年の後)
- 北史倭国伝は、魏志倭人伝、梁書、隨書を参照し、唐の時代に中国へ来た日本人からも情報を得て、記述したものと言われる。
- 「靈帝の光和年間に、その国は乱れ」は、梁書の「光和中」の表現を若干変更したもの。
- 景初3年の記述は、梁書の「至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢」の「淵」の部分の字の「文懿」に変更し、記述。梁書の引き写しと見える。
- 里数の記述、行程など、歴史書から解釈し、自己の判断を加えて記述したもので、更に、信頼性に欠ける。

梁書・北史などの信ぴょう性について

◆ 史料批判 - 歴史研究の鉄則

- 歴史研究は、刑事裁判の論証と似ている。
 - 刑事裁判では、現場検証/証拠品/目撃者の証言が優先されます。
 - 時間が経過した後の証言は、証拠採用されません。
- 歴史では、同様に証拠となる歴史史料の信憑性を、検証する。(これを史料批判と云う)
 - 刑事裁判と同様に、信ぴょう性の無い史料は採用しない。
 - 採用する場合は、採用する内容について、信頼性が有ることを論証する必要がある。
- 梁書の倭国伝（完成 629年）
 - 歴史・風土などの記述は、魏志倭人伝の引き写し。
 - その引き写しの中に、誤記や、想像による誇張や、後漢書からの引き写しが入る。新たな日本との往来による新情報も、有ったと見えない。
 - 梁書の倭国伝に関しては、信憑性は無い。
 - 景初3年の項も、あて推量で、「もっともらしい」理由をつけて、得意げに変更したと思われる。
 - 魏志の記述が、元々景初3年となっていたならば、この「もっともらしい」理由をつけることは却って不自然で、[魏志には2年であったことを示唆する](#)。
- 北史の倭国伝（完成 659年）
 - 梁書の引き写しの部分が多く、梁書の信頼性の無さをそのまま受け継いでいる。
- 日本書紀（完成 720年）
 - 神功皇后の摂政紀三十九年条に「太歳己未。魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡、求詣天子朝獻。」とある。
 - この項の景初3年記述は、[死んでいないはずの明帝の3年と記述するなど](#)、宛て推量で記述していること、[信頼性の無い梁書や北史などを参照した可能性もあり](#)、景初二年を覆す根拠にはならない。
- 梁書・北史などは、信頼性に欠け、景初二年を覆す根拠にはならない。同様に、日本書紀も、信頼性に欠け、これも、根拠にならない。

https://www.ne.jp/asahi/isshun/original/siryo_kanen.html

- 『翰苑』は誤字脱字が多く、また「〇〇曰」と書きながら、引用文が原本と異なっていたり、そのまま鵜呑みにはできない。なお、出典は竹内理三『翰苑』(吉川弘文館)による。 2011.09.03

{ 翰苑 }

{ 魏志倭人伝 版本 }

魏志曰 倭人在帶方東南 炙問倭地 絶在海中 洲島之山
或絶或連周旋可五千餘里 四面俱柢海 自營州東南 經新
羅至其國也

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國
漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸

景初之辰 恭文錦之獻

魏志曰 景初三年 倭女王遣大夫難升未利等 獻男生口四
人 女生六人 班布二疋二尺 詔以爲新魏倭王 假金印紫綬
正始四年 倭王復遣大夫伊聲耆振邪拘等八人 上獻生口也

景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之

- ✓ 魏志では景初二年のことです。
使者の難升米と都市牛利という名が混ぜられ、
献じた斑布は二疋二丈(=百尺)となっています。
以上 東亜古代史研究所 塚田敬章氏のコメント
- ✓ 倭国の項も、違いだらけで、「魏志曰」とは白々しい。少し似た文章で、構文も変更されている。次の魏志曰くの「魏」の字もまず、違う。「親魏倭王」の称号も「新」になっており、人名も似ているがちがいだらけ。
- ウキペディアの翰苑の記述：
 - 660年以前に対句練習用の幼学書として書かれたとされている。
- ◆ 魏志曰くと書きながら、魏志の文字・内容と異なることを書き連ねた文章は、歴史史料として価値は無い。
ウキペディアの「練習用幼学書」が適切な表現と思える。
- ◆ 翰苑を引き、景初3年とした説は、検討にも値しない。

- ・ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると
- ・ 977年から983年(太平興国2-8年)頃に成立した。北宋の太宗(2代)時代、李昉、徐鉉ら14人による奉勅撰。
- ・ 原典からの引用とは限らず、先行する類書である北齊の『修文殿御覽』(佚書)や、唐代の『芸文類聚』、『文思博要』(佚書)からのいわゆる孫引きであることが多い。
- ・ 右を見て、すぐに判るように、章立てから、魏志倭人伝とは異なる。
- ・ 1行目だけを比較すると、すぐに5か所で魏志倭人伝の版本とは異なる部分が見つかる。
- ・ 倭国乱の時期を「漢靈帝光和中」と梁書の記述が挿入されている。
- ・ 景初3年とし、その年を「公孫淵死」と、梁書の「公孫淵誅後」と同意の文章を追加。
- ◆ 太平御覧は、その成り立ちからして、正確に原文を写したもので無く、意図をもって編集したもの。特に梁書を引いている処も多く、信ぴょう性は無い。
- ◆ 従って、太平御覧の「景初3年」は、魏志には元々3年とあったとする論拠にはならない。

魏志曰倭国在帶方東南大海中依山島為旧国百余小国漢時有朝見者今令使訳所通其三十国從帶方至倭循海岸

倭人在帶方東南大海之中依山島為國邑舊百餘國漢時有朝見者今使訳所通三十國從郡至倭循海岸

里多竹木叢林有三千許家亦有田地耕田不足食方行市糴又渡海千余里至末盧国戸四千浜山海居人善捕魚水無深淺皆能沉沒取之東南陸行五百里到伊都国官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千余戸世有王皆統属女王帶方使往來常止住又東南至奴国百里置官曰先馬觚副曰卑奴母離有二万余戸又東行百里至不弥国戸千余置官曰多模副曰卑奴母離又南水行二十日至於投馬国戸五万置官曰弥弥副曰弥弥郝利又南水行十日陸行一月至耶馬台国戸七万女王之所都其置官曰伊支馬次曰弥馬叔次曰弥馬獲支次曰奴佳鞮其属小国有二十一皆統之女王之南又有狗奴国男子為王其官曰狗石智卑狗者不属女王也自帶方至女国万二千余里其俗男子無大小皆黥面文身聞其旧語自謂太伯之後又云自上古以来其使詣中国草伝辞說事或蹲或跪兩手據地謂之恭敬其呼応声曰噫噫如然諾矣

又曰倭国本以男子為王漢靈帝光和中倭国乱相攻伐無定乃立一女子為王名卑弥呼事鬼道能惑衆自謂年已長大無夫婿有男弟佐治国以婢千人自侍唯有男子一人給飲食伝辞出入其居處宮室樓觀城柵守衛嚴峻景初三年公孫淵死倭女王遣大夫難升米等言帶方郡求詣天子朝見太守劉夏送詣京師難升米致所献男生口四人女生口六人班布二疋詔書賜以雜錦采七種五尺刀二口銅鏡百枚真珠鈿丹之属付使還又封下倭王印綬女王死大作冢殉葬者百余人更立男王国中不伏更相殺數千人於是復更立卑弥呼宗女台拳年十三為王国中遂定其倭国之東渡海千里復有国皆倭種也又有朱中儒国在其南人長三四尺去倭国四千余里又有罽国墨齒国復在其南船行可一年至

臺 = 台

邪馬台国は無かった！ 邪馬壹国だ！

壹 = 壹

- 「なかった」論争で有名になった。
 - 話題の「名前」・「呼び方」が違くと、話にならず、大変困る。
 - 決着がつくことが望ましいが、古田vs安本論争は妙な形で終了し、決着していない。 困った問題！
- 現存する三国志(魏志倭人伝)は、1100年代に印刷された版本が複数残る。
 - 百衲本(紹興本) (紹興年間(1131~1162)の刊行) → 共に邪馬壹(=壹)国と記載
 - 慶元本(紹熙本) (慶元年間(1195~1200)の刊本) →
- 魏志倭人伝の中で「邪馬台国」の名称記載は、一箇所のみ。
 - 固有名詞なので、意味・解釈などから判定する基準がないため、誤記が発生したら、誤りを正すことは、一般的には、難しく、不可能。
 - ✓ そこで、現在残された本に邪馬壹国とあれば、『それを正しいと扱うべきである。』一見、正論に見える。
 - 誤記・転写間違いとする根拠は、何か、有るのか？
- 三国志の魏志倭人伝は、「特別な条件」を持つ書物
 - 特別な条件とは？
 - この後に著述された中国の複数の歴史書(後漢書・梁書・隋書)が、日本に関する記事を書く時に、この魏志倭人伝の文章を書き写した、又は参照している。
 - 更に、個々の歴史書には、別の著者による注釈が加えられおり、その注釈も参考となる。
 - このような稀な条件を持つため、この後世の歴史書を調べることで、転写・誤記の有無を確認できる可能性を持っている。

邪馬「台」・邪馬「壺」：論争

- 邪馬台(壺)国が記述された歴史書(注釈)を、まずは、年代順リストアップする。
 - 陳寿の書いた原本には「台」か「壺」かどうかは、不明としておく。
 - 後漢書の范曄は、陳寿の三国志を見ること / 参照することができた。そこには「台」とある。
 - 元の文献(魏志)は、「台」であった。と考えるのが自然。
 - 梁書は、陳寿の三国志も後漢書も見ること可能。そこには「台」とある。
 - 元の文献(魏志・後漢書)は「台」であった。と考えるのが自然。
 - 隋書は、陳寿の三国志も後漢書も見ること可能。
 - 「都は邪靡堆、魏志の説に則れば、邪馬臺というなり。」とあり、この時の魏志では「台」であったことを記している。(邪靡堆の堆は台と同一発音:タイ)
- 従って、隋書成立時(636年)までは、三国志・後漢書・梁書・隋書の全てが「台」であった。

年代	著者	書名	邪馬壺国	邪馬台国
280年代	陳寿	魏志(三国志)	?	?
430~440年	范曄	後漢書		台
629年	姚思廉	梁書		台
636年	魏徵(外)	隋書		台
			誤記発生 →	
676年	李賢	後漢書の注釈	壺?	
1100年代	版本	魏志(三国志)	壺	

- 後漢書の注に面白い記述が有る。
「其大倭王居邪馬臺國(案今名邪摩惟音之訛也)」
その大倭王は邪馬台国に居る
(今の名を案ずると、ヤマユイ音のなまりである)
676年頃に後漢書に注釈を入れたが、この注釈者が、魏志倭人伝の写本に「台」ではない文書を見てこの注釈を入れたと考えられる。
「惟」と同一の発音の文字=「壺」が記載された三国志の写本を見たと考えるのが自然。
- この「写本」と同じものが元になって1100年代の2系統の版本が作られたと考えるとこれらの「台」「壺」が無理なく理解できる。

◆ 邪馬「壺」国は無かった。 ← これが結論。

誤記・転写ミスは：有るのか、無いのか？

- 邪馬台・壺で、転写ミスがあったことが、明確になった。
- しかし、その外にも誤記・転写ミスがあると、云えるのか？
 - 云う場合には、根拠をしっかり出して欲しい。
 - **古文書を、転写ミス・誤記、誤判断、知識不足などと、勝手に言い放つ(書き放つ)人がいるが、不遜な行為。** 間違いとするならば、誰もが納得する明確な根拠を示すことが必要。
 - 特に、邪馬台国論では、都合が悪いことは、「間違い」としてきた百年以上の経歴があるが、歴史研究の本質に戻り、理由なく「間違い」と記すのは止めるべき。

だから、邪馬台国論争は終わらないのだ！

- 写本は、ミスが多いのか？
 - 写本には、2種類ある。
 - **公式文書を専門職が写すもの → 専門職のプライドがあり、ミスは極めて少ない**
 - **個人の必要に応じて写すもの → 関心や必要性の少ない部分にはミスが多い。**
 - このレベルの写本を引き合いに、「写本にはミスは付きもの」というのは、素人。
 - 台と壺：固有名詞で、一カ所だけと云う「ミスが確認できない」最悪な状態で発生。
 - 二年と三年：専門職が行う写本では、あり得ない。
 - 南と東：ミスでは有りえない。
 - 壺与と台与：固有名詞だが、3カ所あり、間違いが発生する可能性は稀。壺与が正しい。

魏の外交戦略を、蜀との戦いから見て行く。

223	黄初4	曹仁が濡須で呉に破れる。	建興1	劉備死す→劉禅が即位(孝懐皇帝)	黄武2	蜀と同盟。
224	黄初5	文帝、呉を攻める。	建興2	呉の使者の張温が来訪。	黄武3	
225	黄初6	文帝、再び呉を攻める。	建興3	諸葛亮、南方平定。	黄武4	
226	黄初7	文帝崩御→曹叡が明帝となる。	建興4		黄武5	
227	太和1	焉耆王が王子を入朝させる。	建興5	諸葛亮、出師の表→漢中に出兵。	黄武6	
228	太和2	公孫淵、遼東太守となる。	建興6	街亭の戦いに敗れる。馬謖を切る。	黄武7	
229	太和3	大月氏が献使→親魏大月氏王と為す。	建興7	諸葛亮が魏の二郡を攻略。	黄龍1	孫権が帝位(大帝)につく。
230	太和4	曹真と司馬懿が蜀に進軍。	建興8	諸葛亮が魏軍と対峙。	黄龍2	夷洲、亶洲に軍を派遣。
231	太和5	司馬懿が蜀軍と対峙。	建興9	諸葛亮が司馬懿と対峙。	黄龍3	
232	太和6	許昌に宮殿造営。	建興10		嘉禾1	遼東に使者を送る。
233	青龍1	公孫淵を楽浪公に任ずる。	建興11	陳寿が生まれる。	嘉禾2	公孫淵が呉を裏切る。
234	青龍2	明帝が呉に親征。	建興12	諸葛亮が陣中に死す。	嘉禾3	孫権が合肥新城に進軍。
235	青龍3		建興13		嘉禾4	
236	青龍4	高句麗王の位宮が呉の使者を殺す。	建興14	後主が地方を巡幸。	嘉禾5	大錢を鑄造。
237	景初1	太和暦から景初暦に変更。 青龍5年3月を景初1年4月に変更。 公孫淵が自立して燕王を称する。	建興15	皇后の張氏(張飛の娘)が死去。	嘉禾6	
238	景初2	司馬懿が公孫淵を征伐。 倭女王が遣使→親魏倭王に封ずる。	延熙1		赤烏1	
239	景初3	明帝が病死。 齊王・曹芳が帝位(少帝)につく。	延熙2		赤烏2	
240	正始1	暦を戻す。景初3年12月を2回置く。	延熙3	梯儁—倭国訪問	赤烏3	
241	正始2	呉の侵攻を防ぐ。	延熙4		赤烏4	軍を進めて、魏と対峙する。
242	正始3		延熙5		赤烏5	珠崖、儋耳を討つ。
243	正始4	倭女王卑弥呼が再び遣使。	延熙6		赤烏6	
244	正始5		延熙7		赤烏7	
245	正始6		延熙8		赤烏8	
246	正始7	毋丘儉が高句麗の丸都城を落とす。	延熙9		赤烏9	
247	正始8	曹爽が専制政治。	延熙10	張政—倭国訪問	赤烏10	
248	正始9		延熙11		赤烏11	



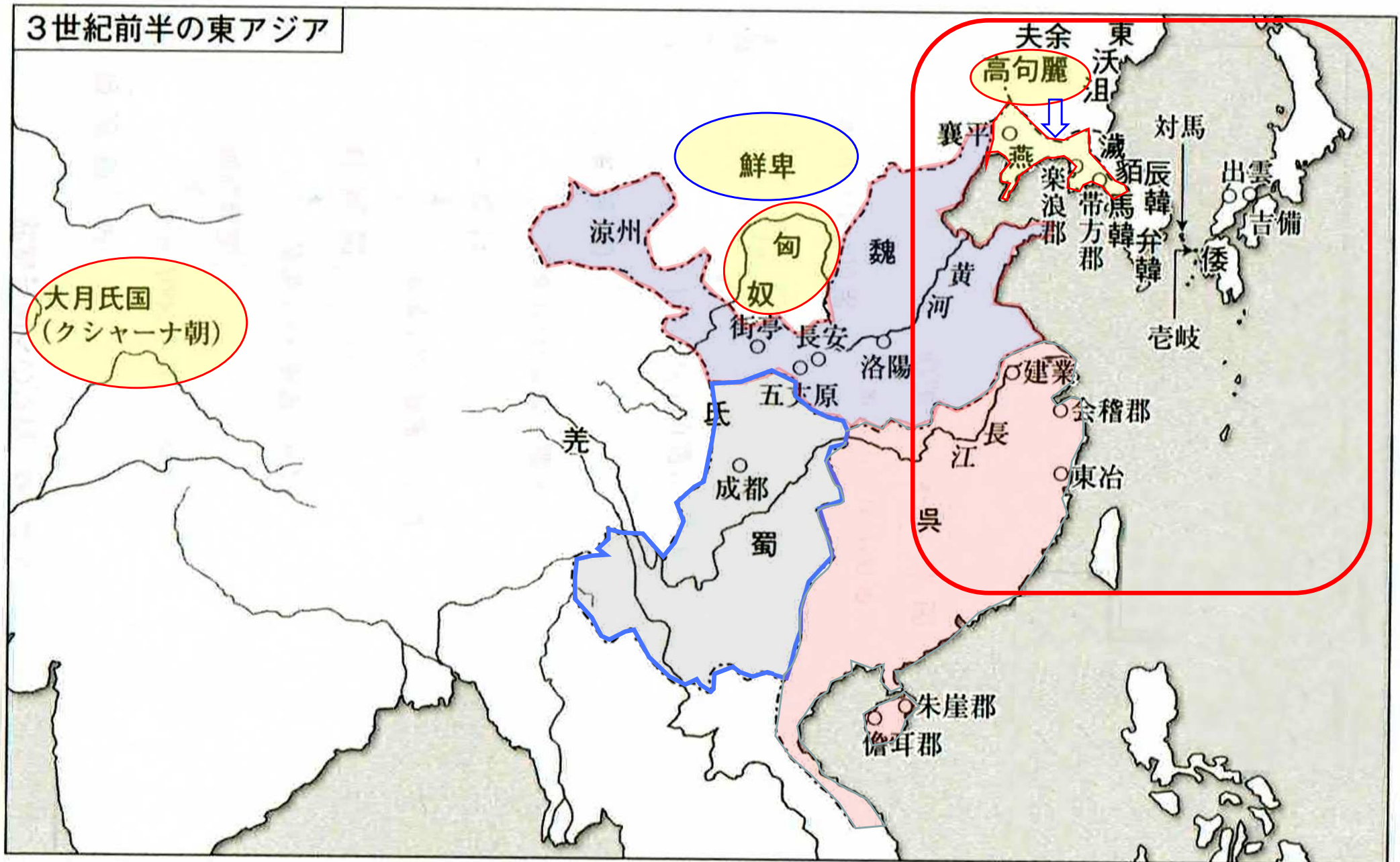
諸葛亮の北伐と涼州

涼州(りょうしゅう)の争奪戦
 外交を考える

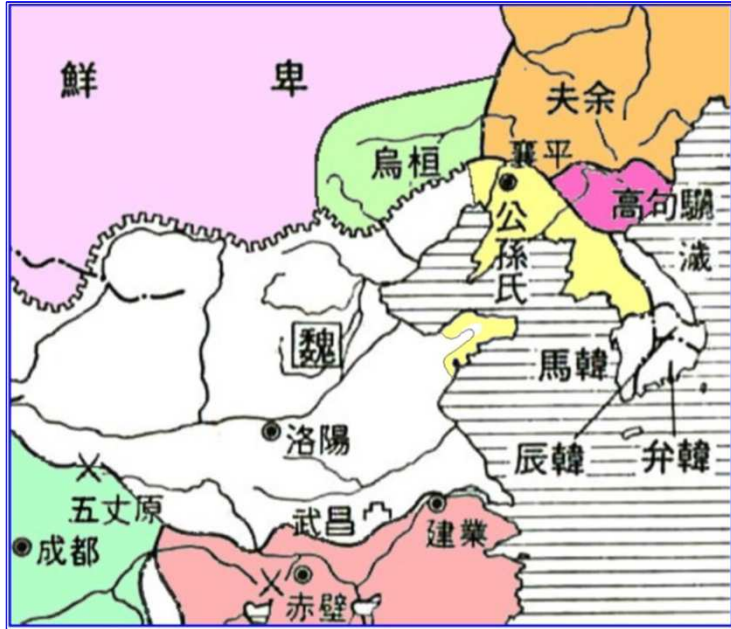
http://k.sina.com.cn/article_3_937915748_eab7d36403400_2wxc.html

諸葛亮北伐占据过那么多郡, 为什么不长期占有呢? の図を参照

- 諸葛亮の第一次北伐(228年)は、おとりの趙雲軍が魏の主力の曹真軍を引き付けた。(渡邊氏の本では227年)
- 天水・南安・安定の三郡を取り、涼州を魏から遮断した。
- 魏の明帝は自ら長安に出陣し、呉に備えていた張郃(ちょうごう)を救援に向かわせた。
 - 張郃の到着までに、涼州を落とせば、蜀の優位は変わらない。
- 諸葛亮は、張郃を食い止める場所を街亭と定め、その守将に馬謖を命じた。
 - 馬謖は大勝を求めて、諸葛亮の命令を無視し、張郃に敗退する。
- ◆ 第5次まで北伐が行われたが、蜀に勝機があったのはこの第1次北伐だけであった。
 - ✓ 229年大月氏国の波調王が魏に朝見し、明帝に歓待された。
 - 諸葛亮の異民族と連携は止まず、233年鮮卑が魏に背いた。
- 第5次北伐の最中に、諸葛亮は、五丈原で病死(234年) → 魏の勝利が確実になった。



呉の外交



地図は、大庭脩著「親魏倭王」より三国時代の地図 北東部分に彩色 彩色部分は正確ではないので参考程度に見て下さい。

青州の地図 [HOME](#) > [三国志総合事典 \(正史\)](#) > [州地図](#) >

後漢後期 (180年頃) の地図です。

1、郡地図



渤海郡・甘陵国→冀州 / 東郡・濟北国・泰山郡→兗州 / 琅邪国→徐州

- ・ 曹魏と戦っていた呉も、外交戦略を展開していた。
- ・ 公孫氏は、遼東支配に加え、朝鮮半島への進出を後漢末より開始。
 - ・ 楽浪郡の南に帯方郡を置き、韓・濊(わい)の地域を平定。
 - ・ 山東半島の東萊地方に英州刺史を置いた。
- ・ 229年:呉の孫権が皇帝に即位し、公孫淵に通知。積極外交開始。
 - ・ 大月氏、魏に朝貢し、「親魏大月氏王」に。
 - ・ 230年:孫権は、二将軍に命じ、1万人を率いて、夷州・亶州を探索。二将軍はたどり着けず。(死罪)
- ・ 232年:孫権は馬の購入を名目に、公孫氏へ使者を派遣。
 - ・ 公孫淵は臣下の申し入れをする。
- ・ 233年:孫権は、公孫淵を燕王に冊封する使者(兵1万)を送る。
 - ・ 公孫淵は、魏の圧力を受け、使者を殺し、首を魏に送る。
 - ・ 魏の明帝は、公孫淵を大司馬・楽浪公に封建。
 - ・ 鮮卑が、魏に背き諸葛亮に呼応。(渡邊氏の記述には無い)
- ・ 234年: 呉の使者の一部は、公孫淵の手を逃れ、高句麗へ
 - ・ 高句麗王位宮は呉使者を送り返した。
- ・ 235年:孫権は、位宮に「单于」の称号を与えるべく、使者を送る。
 - ・ 位宮は、魏の圧力により、呉の使者を拒否。(高句麗は、馬数百頭進呈を申し出たが、呉は、船が小さく、80頭だけを持ち帰った)
- ・ 236年:孫権が位宮へ派遣した使者は切られ、首は魏に送られた。

景初年間													
232年	233年	234年	235年	236年	237年7月	同年7月の後	238年正月	同年	238年6月	238年8月	景初年間	239年3月	240年
孫権、公孫淵に使者を送る	魏は公孫淵を再び遼東太守に 公孫淵、呉の使者を切る	諸葛亮孔明・病没			明帝の詔書で公孫淵を召し出す 丘儉軍勢を出し、	公孫淵は反旗をひるがえす 青・兗・幽・冀の四州に詔勅を出し、大いに海船を造らせた	司馬懿仲達は公孫氏撲滅に出撃	高句麗、数千の兵を派遣	倭の使者を都へ送った。 帯方郡太守劉夏、	司馬懿仲達は公孫氏撲滅	秘密裡に海路郡を平定 帯方郡・楽浪郡太守を任命	呉は軍と使節を遼東に派遣し、	魏の守将を撃ち、捕虜をとった。 倭国訪問 太守弓遵遣建中校尉梯儁等

疑問？

三国志の本文・
東夷伝を整理

- 景初年間、秘密裡に海路で、帯方・楽浪を占拠したのは、何年の事か？
 - 公孫氏が背き、敵となった以降は、公然を敵対行動がとれる筈。
- 237年7月以降に詔勅を出し、「大いに海船を造らせた」場合、海船の完成は何時か？
 - 大型帆船建造には、船材の調達・建造に1年以上かかる筈。
 - 景初2年の出撃には間に合わない筈。
- 景初年間という曖昧な表現は、ここだけで、怪しい。(陳寿がその明確な時期を知らなかった筈はない。)
- 239年3月に呉は、「魏の守将を撃ち、捕虜をとった。」これは魏と倭国の使者に影響を与えたのでは？

237年(景初元年)の毌丘儉の遼東攻撃と 気になる前後の事件

- 236年: 毌丘儉が公孫氏討伐を提言。退けられた。
- 237年7月・ 幽州刺史毌丘儉を派遣、諸軍及び鮮卑・烏丸の軍勢を統率させ、遼東の南岸に駐屯。
 - 天子の印を押した**詔勅**により公孫淵を召し寄せた。
 - 公孫淵は出兵して反旗をひるがえした。
 - 毌丘儉は進軍し、征伐しようとした。
 - 雨が十日間続き、遼水があふれた。
 - 毌丘儉へ**詔勅**を下し、軍を引き揚げさせた。
 - 遼東に居た烏丸の単于などを、毌丘儉のもとに帰順させた。
- 公孫淵はついに自立し、燕王と称し、百官を設置、年号を立てた。
- 青・兗・幽・冀の四州に**詔勅**をだし、大いに海船を造らせた。
- 238年正月: 司馬懿は、4万の軍を率いて、公孫淵討伐に出陣。8-9月に公孫淵を撃つ。
- 238年: 高句麗の位宮は、主簿と大加とを遣わし、数千人を率いて力ぞえをさせた。
- **景初年間**(237-239年): 明帝は帯方太守に任じた**劉昕**(りゅうき)と楽浪郡太守に任じた鮮于嗣(せんうし)とを遣り、**秘密裡**に海からそれぞれの郡に入って、郡を平定させた。
 - 韓の諸国の臣知たちには邑君の印綬を授け、それに次ぐ実力者たちには邑長の位号を授けた。
 - 礼服や頭巾を好むこの地の人々には、礼服や頭巾を貸与した。
- 238年: 景初2年6月: 帯方郡太守**劉夏**(りゅうか)は、倭の使者を都へ送った。
 - 景初3年1月: 明帝死去
- 239年: 赤烏2年3月 = 景初3年: 呉の使者の羊衛(ようどう)・鄭胄(ていちゅう)と將軍孫怡(そんい)を遼東に派遣し、**魏の守將の張持(ちょうじ)・高慮(こうりょ)**を撃って、その配下の男女を捕虜とした。
(渡邊氏の著書に、この記述は、無い)

気になること
疑問点

魏志の本文

東夷伝

倭人伝

呉志の本文

237年(景初元年)の毌丘儉(かんきゅうけん)の遼東攻撃への疑問

- 主な周辺国の三国との提携関係を見ると、公孫氏は、207年から一貫して、魏に従っていることが判る。
 - 呉の孫権の外交攻勢が232年から公孫氏や高句麗に、積極的に行われた結果、一時的に、公孫氏及び高句麗が呉との交流を図ったものと見られる。呉の「馬」を入手したいとの願望と、呉の持つ魅力的な品々に誘われて、交流を図ったもの。
- 魏・明帝は、烏丸(うがん)・鮮卑・扶余などの東北部の夷狄の懐柔には、心を砕いていたはずと推測。
 - 魏にとっても、従属の姿勢を見せる公孫氏は、外交戦略上、価値が高かったと推測。
- 234年に一番危険な相手であった諸葛亮孔明が死に、蜀の圧力が減じた時点で、魏の戦略は、残る宿敵の呉の打倒に切り替えられた。
- 237年の魏の毌丘儉が、魏に従属する公孫氏への突然仕掛けた戦争は、外交戦略上、不可思議なもの。
 - 魏の出兵理由は：
 - ① むかし、呉が遼東を犯そうと軍隊を出したことがある。
 - ② これに対応するためと称し、遼東の南境に軍を展開し、駐屯した。
 - ③ 魏の皇帝の詔勅を出し、公孫淵を魏の都まで召し寄せた。(出頭を命じた。)
 - 公孫氏の側から見ると。
 - 呉が軍隊(使節)を出したのは、232年で5年も前の事。
 - 明帝に許されて、遼東太守に再任命され、済んだこと。
 - 遼東は、公孫氏の支配地で、魏からも遼東太守を命じられ、公認されてきた。
 - その公孫氏の支配地に、向けてズカズカと兵を進めること自体は、遼東太守の権限をないがしろにする行為。
 - この軍隊を動かした魏の行為は、従属を誓う友好国を、理由なく攻める「理不尽な行為」。
 - この行為は、公孫氏以外の魏に従属を誓った国々に恐怖感を与える、外交上の汚点。
- ✓ 毌丘儉は、前年に、特に功績の無い明帝のために、公孫氏攻略を提言したが、否決されていた。
 - この一度、廃案になった戦争行為が、復活したからには、何か理由があるはずと見る。

魏の外交戦略のポイント：景初2年正月の司馬懿仲達の回答

裴松之の記した注記に記載された文が、明帝と司馬懿仲達の戦略の中核を示している。
 (三国志の著者の陳寿は、明確にしなかった(したくなかった)が、裴松之は注釈に入れてしまった。)

景初2年正月の祝いの席で、魏の明帝が司馬懿仲達に訊いた。
 司馬懿仲達の公孫淵討伐軍に対して、公孫氏の取る戦略は？
 司馬懿仲達は応えて、次の3つの選択肢を示した。

上策：城を捨てて逃げる

中策：城を出て、遼水を使って魏軍に対抗する

下策：籠城すること

そして、上策はとらないと断言した。

この判断の根拠はどこにあったのか？

- 策士と歴戦を戦い抜いた将軍が、根拠なく答えることは無い。
 - 既に退路が断たれていた筈。
 - 東の楽浪・帯方は占拠済み。
 - 高句麗も出兵の確約を得た。
- 明帝もこれを知っていて、出兵の命令を出し、正月の祝いの席で、仲達に問い、答えさせたもの。



明帝と司馬懿仲達の戦略と結果



237年(景初1年)7月： 毌丘儉、烏丸等の勢力を集め遼東南岸に駐屯。

☆ 公孫氏を挑発し、離反を宣言させた。

☆ 公孫氏の戦力と注意を西側に誘導

➤ 海船を樂浪郡・帶方郡へ密かに送り、樂浪郡・帶方郡を占拠
東の退路

✓ 速やかに領民の人心を掌握し、治安に務める

✓ 樂浪郡・帶方郡に到来・駐留していた東夷部族へ、魏が樂浪・帶方郡を掌握したことを通知

238年(景初2年)正月： 司馬懿仲達は、4万の軍を率いて、公孫氏討伐へ出立を宣言。

➤ しかし、軍の進軍を途中で止める。(『晋書』宣帝紀)

✓ 高句麗は、景初2年、魏の要請で数千の兵を派遣 北の退路

✓ 公孫氏の退路が断られたことを確認して、進軍再開。

✓ 司馬懿軍が遼東に到着、攻防が始まり、司馬懿軍は襄平(公孫氏の本拠地)へ急行。公孫氏軍を打ち破り、。

238年6月には、公孫氏軍は襄平に籠城し、膠着状態へ。

✓ 魏の帶方郡占領の情報を得た倭の邪馬台国の朝貢使者が帶方郡へ到着

✓ 帶方郡太守劉夏は、倭の使者を都(洛陽)へ送り届けた。

238年8月(9月)： 公孫淵死亡し、司馬懿の遼東攻略完了

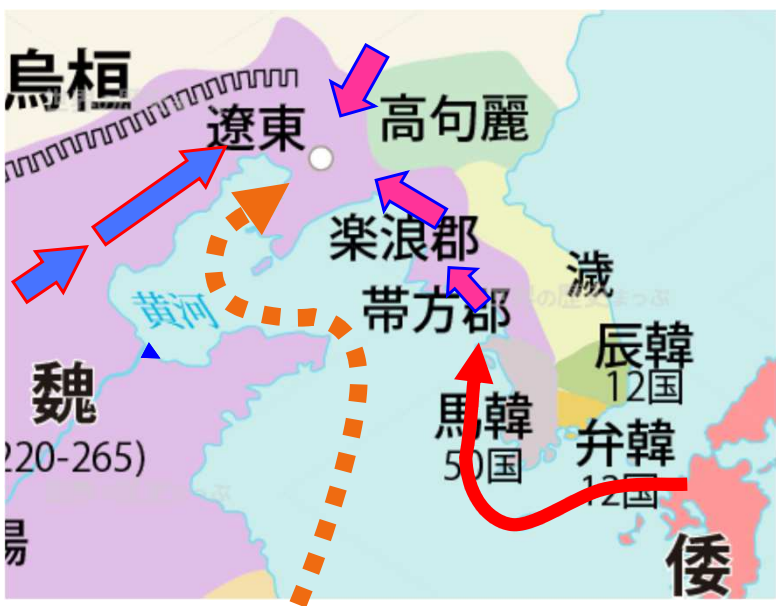
238年12月： 明帝が倭の使者に面会し、称号や品々を贈る

12月8日： 明帝は病に臥せる。239年正月： 死去

239年3月： 呉が遼東に軍を派遣、魏の守将を撃ち、捕虜をとる

魏は、倭国への使節派遣は出来なかった。

240年： 魏の帶方郡太守弓遵、梯儁を邪馬台国へ派遣



2 3 2年	2 3 3年	2 3 4年	2 3 5年	2 3 6年	2 3 7年7月	同年 同時期	2 3 8年正月	同年	2 3 8年6月	2 3 8年12月	2 3 9年正月	2 3 9年3月	2 4 0年 夏			
孫権、公孫淵に使者を送る	魏は、公孫淵を再び遼東太守に 公孫淵、呉の使者を切る	諸葛亮孔明・病没 司馬懿は大軍と共に帰国	明帝と司馬懿で戦略を練る	青・兗・幽・冀の四州に詔勅を 出し、大いに海船を造らせた	毋丘儉、公孫氏討伐を提言	毋丘儉軍勢を出し、	公文書で公孫淵を召し出す	公孫淵は反旗をひるがえす	帯方郡・楽浪郡太守を任命 秘密裡に海路郡を平定	司馬懿は公孫氏撲滅に出撃。	高句麗、数千の兵を派遣	倭の使者を都へ送った。 帯方郡太守劉夏、	魏王、倭の使者に面談	明帝死去	呉の軍と使節を撃ち、捕虜をとった。 魏は軍と使節を遼東に派遣し、	倭国訪問 太守弓遵遣建中校尉梯儁等

推測する 明帝と 司馬懿仲達 の戦略と結果

- 諸葛亮孔明の没後、明帝と司馬懿仲達は、対呉戦略を検討。公孫氏撲滅のため、海船を作らせ、海軍力増強。
- 毋丘儉の提案を受け、景初1年の戦略を決定。
 - 毋丘儉に烏丸軍などを付け、遼東の国境の大軍を配置。理不尽な要求を、明帝の詔書として、公孫淵に突きつけ、怒らせる。反旗をひるがえさせたことで、外交戦略上の大儀名分を得て、毋丘儉に戦闘を切らせた。
 - 毋丘儉の遼東の西側からの布陣で、手薄になった東側を密かに、海船で攻め、楽浪郡・帯方郡を占領。現地の人心を安定させるため(反撃を受けないため)、官位や印章、官衣・被り物などを乱発し、短期収束を図った。
 - 公孫淵と毋丘儉の戦闘は、雨降り10日という時期を見て、詔勅をもって、毋丘儉の行動を押さえた。
大義名分を得ること。遼東の東側の作戦の円滑な実行ができたことで、十分な成功であった。
- 景初2年正月から司馬懿仲達が、予定通り公孫氏の撲滅の作戦を実行。
 - 景初1年夏に帯方郡を魏が占領・支配したことを知った倭国:邪馬台国がいち早く、景初2年6月に帯方郡へ朝貢目的で到来。予想外の速さと対呉戦略上重要な国からの訪来を喜び、都へ送り届けた。

1. 「倭人伝の執筆意図」との項を立て記述 『偏向』

- 陳寿は、蜀の地に生まれ、史書編纂を職務として蜀に仕えた後、魏を継いだ西晋に仕えた。陳寿を認め、推奨した張華も杜預も、西晋における討呉派で、討呉を正統化すべき立場にあった。
- 西晋の武帝が、蜀を好意的に記した史書を評価し、陳寿を認めたことから、陳寿は「三国志」の執筆ができた。武帝の父は司馬昭で蜀を滅ぼした人物でしかも諸葛亮を高く評価した。その父が司馬懿。
- 陳寿には、西晋の皇室司馬氏を賞美すると云う政治的要請に基づく「曲筆」があると断定。
- 陳寿は、司馬懿の功績として、蜀の諸葛亮と戦い、持久戦を強い、結果的に勝ったことと、公孫淵討伐の二つを記述している。
- 公孫氏を滅ぼしたことを顕彰する意図があり、卑弥呼の朝見は、司馬氏の始祖である司馬懿の功績として大書されるべき事柄であった。倭への過大な評価・記述など偏向が見られるが、この偏向の最大の理由はここにあると断定。
 - 沈家本が、「景初2年6月に(使者が)来れば、そのとき遼東はちょうど魏と(公孫氏とが)戦っており、魏にはまだ帯方太守がおらず、倭の使者が通じることにはできなかった」と述べている。
 - 戦争中の遣使は、軍を率いる大尉司馬懿の徳を言祝ぐものにはならない。として、2年説を否定。
 - 景初3年は、司馬懿が政治の実務から離れた時期で、倭の使節に直接会っていないことも承知する。
- 晋書では、司馬懿こそが卑弥呼の朝見をもたらしたものと明記されている。と論拠をあげ。
- 西晋で『三国志』を著した陳寿の執筆意図は、卑弥呼の遣使が景初3年でなければ達成できない。とする。

2. 陳寿の三国志に「曲筆」があったとすると

- 秘密裡に海路から実行した帯方郡・楽浪郡の平定を、景初中とあいまいにしたこと。(魏志東夷伝に記載)
- 海船製造指示の詔書を、海船の完成時期のこととしたこと。(本文に記述)
- 関連する事項を一カ所にまとめず、本文・倭人伝・東夷伝などバラバラな個所に記したこと。
- この「曲筆」により陳寿は、
 - 外交政策として見た場合、「従属の意思を示し、認証されていた友好国」の領地を武力で制圧し、占領したという大義名分の無い戦争(司馬懿仲達の外交上の汚点)を上手に隠したもの。
 - ✓ 疑心暗鬼の邪馬台国研究者は、この曲筆により、ひどく理解が混乱した。

魏の公式使節（倭国へ二つの使節団）

240年と247年の2回、魏の使節は倭国を訪問した。それは下記のような状況の下で派遣された。

- AD 238年(景初2年6月) 卑弥呼使節(難升米)を帯方郡に送り、朝獻を求めた。
帯方郡太守は都に使節を送り届けた。
同年12月 魏の帝は詔書に卑弥呼を「親魏倭王」とし、
金印紫綬と詔書を帯方郡太守に託した。→ **これを魏の使節は持参し、卑弥呼に渡す役割を負う**
金・錦・刀・鏡など財宝は難升米達に渡された。→ 持ち帰り、国中に示し、友好関係を示すこと
- AD 239年(景初3年1月) 魏の明帝が死去(魏書 明帝記による)
同年3月 呉は、海路、遼東半島に派兵、魏の守備隊を破る。(呉志による)
(魏の使節の出発が1年遅れたのは、明帝の死去と呉との戦乱が理由)
- **AD240年 帯方郡の太守弓遵は、建中校尉梯儁を使節として、邪馬台国を訪問させた**
卑弥呼に会い、魏の旧帝の詔書・金印と、現帝の詔書と財宝を授けた。
 - AD243年 倭王=卑弥呼は再び使いを魏に出す
 - AD245年 魏は、倭の難升米に黄幢(軍の指揮用の旗)を送り、帯方郡に預けた。
- **AD247年 狗邪國の男王・卑彌弓呼素と不和が報じられ、帯方郡の太守は、張政を送り、**
詔書と黄幢を難升米に届け、狗邪國との調停を行った。
卑弥呼が死に、径100歩余りの大きな塚を築いた。
男の王が立ち、國中服従せず、1000人余りが殺戮された。
卑弥呼の宗女壹與13才を王として、収まった。
壹與は朝獻の使節を魏に出し、張政を送った。

漢・三国時代の時代の外交使節の概要

魏の使節(240年:梯儁)の使節の人員数・規模・体制は、邪馬台国の研究に際しては、基礎的な情報として、把握する必要があるものと考え。その参考とするため中国の事例を検討する。

- 漢の時代の例：
 - BC140～135年 張騫(チョウ ケン)の大月氏国へ訪問 人員100名
 - BC119年 張騫 西域の烏孫へ訪問 人員300名
(1名あたり、馬2頭、牛・羊数万匹、外に贈呈用金銀布帛)
- 三国時代の呉の例
 - 230年:孫権は、二將軍に命じ、1万人を率いて、夷州・亶州を探索。
 - 二將軍はたどり着けず。(死罪)
 - 233年：孫権は、公孫淵を燕王に冊封する使者(兵1万)を送る。
- 西域へ砂漠を行く張騫の例では、百人単位、しかし、牛・羊数万頭との記述は、規模としては壮大。
- 同時代の呉の使節は、船舶で移動する使節では、万人の単位。
- 魏の使節の場合は、この呉の例が参考となると思われる。
 - 初回の訪問： 人員は最低でも500名。数千名規模と推定する。

初回倭国へ派遣された使節団の概要を推定する

- 魏の使節は、**新旧の詔書と金印紫綬**、更に**財宝(贈呈品)**を持ち、無事に相手に授与し、**友好関係を確立し**、更に、**倭国に関する報告書**を作成し、**確実に戻り**、**報告をすべき立場**にいた。
 - 安全確保
 - 呉の使節も行けなかった未知の地域の国へ行く
 - 航路の危険、(風・嵐・海流・潮流・浅瀬・岩礁・地図)
 - 航路途中の国々の危険(停泊地の安全、水・食料の補給)
 - 敵の呉及び呉の協力国の襲撃、等
 - 友好関係の構築
 - 人材・贈呈品などの準備(嗜好品・装飾品・音楽・舞踊・衣類等)
 - 情報調査能力・人材の配置
 - 中国の辺境の風俗習慣を知る人材
 - 植物・動物などに精通した人材
- 呉の例(1万人)を考慮し、推定する。
 - **その規模は、使節団として、1千人**
 - **船舶の操船と警護の兵員2千人 合計人員 3千人**
 - **船群は、100人乗りの帆船を主として、30~50隻ほど**

魏の公式使節(正始元年:240年)の倭国の対応・待遇

- 魏の公式使節は、倭人(邪馬台国)から疑心暗鬼の待遇を受けたのか？
 - 「事あらば、邪馬台国を武力侵攻する」下心があり、偵察を兼ねている。
 - 邪馬台国側は、武力侵攻の基礎データである距離・方位などを把握できないように、留意した。
 - 判り難い道を選び、道案内した。
 - だからと、旅程・距離・方位は判りにくい。
- では、どのような待遇を受けたのか？
 - 外交交渉なので、魏と邪馬台国の双方の動き(記述)をみる必要がある。
 - 卑弥呼の使者が、魏を訪問し、魏の王朝から受けた待遇は、
 - **最恵国待遇**。 --- それ以上かも知れない。
 - 大量の豪華な贈り物を邪馬台国へ送り、それを、人々に示し、渡すようにわざわざ言っている。
 - 魏の王が、親魏倭王の称号と金印紫綬を、直接女王に渡すための使節を訪問させると、宣言している。
 - 邪馬台国側は、
 - **豪華な贈り物を持ち帰り、魏王朝のメッセージと使節来訪予定を伝えたはず。**
 - 魏の公式使節の受け入れ態勢を、国として、検討したはず。
 - 魏志倭人伝の記述を読むと、対馬・壱岐の対応は、島(クニ・村)の中を案内し、生業・暮らし振り伝え、島の長・副官が対応し、島を挙げての対応であったと見える。
 - ✓ 後に、狗奴国との紛争の際に、応援を求めた事も、緊密な関係を構築した結果と見える。
 - **邪馬台国側も、最恵国対応を行ったはず。**
 - 魏の使節の訪問が順調に進むように、途中の国々にも、事前の連絡を入れ、準備させたものと理解します。

魏の公式使節のコース選定

- そのコース取りは、邪馬台国側が情報提供し、倭国内は、「最善のコース」を進めたものとする。
 - 魏にとっては、初めての、未知の国への訪問であった。
 - 500名～数千名規模の公式使節を効率よく・安全に到着させることを念頭に。
 - 邪馬台国側は、水先案内人を付け、先導する船舶を付けたとも推測する。
- 最善のコースとは、どんなコースか？
 - 女王の宮殿が最終目的地
 - 魏の使者の目的は女王への面会と書面・金印などを渡すこと。
 - 最も安全なコース。
 - 魏又は帯方郡を訪問した倭の使節の帰国ルート。
 - 最終到着港は、最も栄えた港。
 - 陸路は、最も整備された、危険の少ないコース。
- ✓ コース設定に際して
 - 魏の使節(帯方郡の役人)とコースについての協議が行われたと見る。
 - 事前に、コースの「距離数」と「所要日数」を伝え、合意を取っていたはず。
 - 受け入れる側の倭の役人にとっても、魏の役人にとっても、成功には欠かせない打ち合わせだったはず。
- ✓ 船舶の航海能力・サイズは、コース取りの重要要素
 - 帆船と手漕ぎでは、到達距離が違う
 - 魏の最も優秀な船舶が選ばれたはず。
 - 船群 : 大切な任務を持つ場合、1隻では運用しないのが原則。

- 使節の訪問コース選択の要件

- 魏の使節の使用する船舶。
- 一国の公式使節であるため、魏の搭乗船は、魏の最も優れた船舶と考える。
- 魏の北側の海: 黄海を通り、朝鮮半島と更に未知の倭国へ行く最適な船舶は？
 - 237年(景初1年) 魏は毋丘儉の軍勢を出し、公孫淵を挑発、反旗をひるがえさせた。
 - 237年 青・エン・幽・冀の四州に命じ大いに海船を建造させた。
 - 景初年間 (237年景初1年と推定) 大船で軍を密かに渡海させ、公孫氏に占拠されていた楽浪郡・帯方郡を回復。東側から公孫氏を抑えた。
 - 景初中、大興師旅、誅淵、又潛軍浮海、收樂浪、帶方之郡
 - 238年1月 魏の司馬懿仲達が公孫淵討伐に出立
高句麗は、魏の要請に応じて数千の兵を派遣(東夷伝)
 - 238年8月の公孫氏を討伐。
- その海船は、北の海で、外洋航海できる最も優れた船だったと考える。
(勿論、手漕ぎの船は有りえず、大型の帆船となる。)
- 魏の使者は、絶対に、倭の使節の船に同乗させてもらうことは無い。
 - 倭国の船は、もちろん帆船であった。手漕ぎの船ではない。

- 古い船の遺物は、残らない。
 - 発掘された舟・船の古いものは、ほとんどが丸木舟。
 - それが、準構造船となり、構造船と進化したと云われる。
 - 進化した船の材料は、保存が厳しくなり、水中で朽ちてしまう。
 - 3万5千年以上前に伊豆の神津島から黒曜石を持ち帰った舟は、出土していない。
 - 古代に丸木を削りだして舟を作った専用の石器(楳の原型石斧)は、14000年前の沖縄で出土。
 - 九州に伝播し、9000年前に火山爆発で、生活基盤が失われ、石器の形状は変形し、日本各地へ伝播。
 - 日本海側の京都付近で、縄文前期(12000年～)の出土が2例あるが、次の時代は3000年前の縄文晩期。
 - 古い舟は、遺物として残ることは稀。
- 魏の使用した帆船の図面も無いし、絵図もないため、実際のサイズ船型などは判らない。
 - ✓ 船自体の遺物では無く、別の方法から探り出すことが必要。
 - 魏よりも前の時代: 秦の時代の造船所の遺跡が、造船の後進地帯の南方の広州で出土。船長30m規模の船舶用の造船所。
 - 造船の先進地帯の山東半島に近い四州で、後の時代に作られた船は、どのレベルか？

秦時代の造船遺跡

- 1997年に廣州市中山四路市で秦王朝造船所を発掘。
 - 造船所は灰黒色の堆積粘土層の上に建てられており、
 - 北東南西方向に平行に配置された3つの木製造船所と木材加工工場が並ぶ。
 - 船台の構造は、
 - 滑走台を形成する大きな厚い板(クスノキ)の2つの平行な列で構成されています。
 - (板は幅60cmから75cm、厚さ15cmから17cm)。
 - 枕木(杉や葦の木)が下に置かれています。(形状は現代の鉄道のように)
 - 幅8m、長さ30m、50-60トンの木造の船舶が建造可能。
- 秦始皇帝が嶺南を制圧した時期に、番禺(現在の広州)の秦軍が、ベトナム平定のために多数の標準型の船を建造した。歴史的には、この時の遺跡とされる。



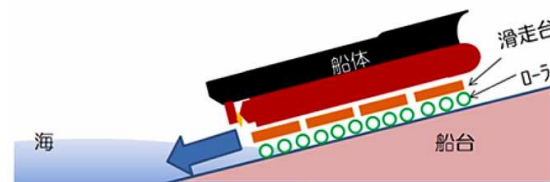
造船所遺跡



滑走台遺構



現代の滑走台
四国ドック株式会社HPより



木材加工工場



三国志の時代の船の大きさ・規模

- 三国志時代の船舶については、2021年3月の話と資料で示している。
- ここでは、歴史書に現れた船を使った戦いや使節について拾い掲げる。

1. B.C.109年、武帝は、朝鮮討伐の為、

楼船(ろうせん)将軍・楊僕(ようぼく)に**5万の兵**を与え、

山東半島から**海路**、朝鮮へ侵攻させた。

陸路は左将軍・荀彘(じゅんてい)に、遼東から出征させた。

→漢軍は両将軍共に、初戦で敗北

2. 230年:孫権は、二将軍に命じ、**1万人**を率いて、夷州・亶州を探索。

3. 232年3月、孫権は、遼東に将軍周賀と校尉の裴潜を派遣。「**浮舟百艘**」と記される。

4. 233年、孫権は、張弥、許晏、将軍賀達らを使者として、**兵1万**を率いて、遼東へ派遣。**実数は7-8千人**とも云われる。

5. 235年:孫権は、位宮に「单于」の称号を与えるべく、使者を送る。

位宮は、魏の圧力により、呉の使者を拒否。

高句麗は、呉の使者を捕えようとしたが、見破られ、逆に人質を取られた。

その解決策として、高句麗は、馬数百頭進呈を申し出たが、呉は、船が小さく、**80頭だけ**を持ち帰った

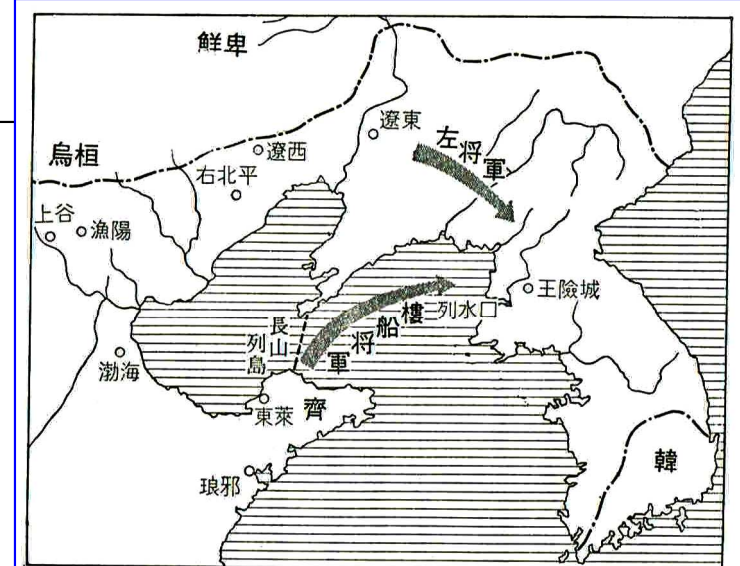
➤ 紀元前100以上前に、既に、山東半島から、朝鮮半島まで、5万の兵を船で移動している。

$100 \times 500 = 50,000$ 人 100人乗りの船で500隻が必要。

➤ 呉の孫権は、長江河口から、黄海・渤海を越えて、遼東や、高句麗(鴨緑江中流)へ使節や軍を送っている。

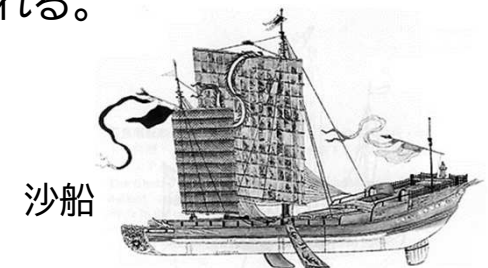
- 実際に動いていた船の大きさと隻数は、現代人の想像を上回る。

- 紀元前3世紀の長30m・巾8mの船を製造した造船所跡が広州で出土。



漢の朝鮮侵攻図

大庭脩著「親魏倭王」より



沙船

沙船

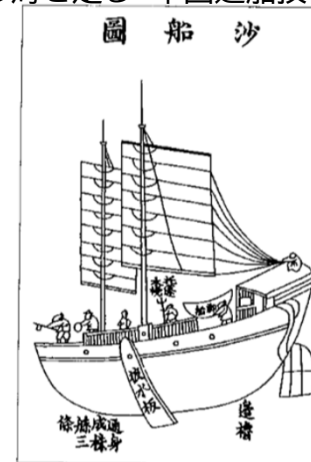
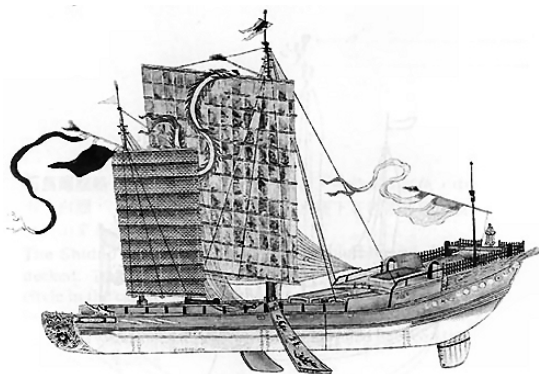


- 船舶概覧 | 中国四大古船 2017-02-19 由 海洋探秘 发表于 歴史 <https://kknews.cc/history/p85m2gz.html> 訳責丸地
- 沙船は、中国の古い海船の船型の一つで、浅い水深に適合し、海難の多い航路を航行し、この沙船と云う名を得た。南北朝時期(439年~589年、隋が統一するまでの期間)に、朝鮮と日本へ航行する船はこの種類。唐・宋時期に、基本的な発展があり、型が定まった。明代に至り「沙船」の名称と成った。
 - 沙船は船底が平で、吃水が浅い。潮が退いた時にも浜に平らに置くことができ、浅瀬に強い**平底船**と言われた。沙船は、長江の河口以北の特に江蘇省の沿海および渤海の水深の浅い海域で用いられた。沙船は、一般的には、**帆柱が5本有り、長方形の縦帆**を掛ける。**船の両舷に披水板**を用いることがある。(横流れ防止用)**舵は昇降が可能**。水深が浅い海域にあっては、披水板と舵を共にも上げることになり、オールで推進し、櫓で操縦する。水深の深い所に到着すると帆走する。船は、舵と風下側の披水板を船底より下に降ろす。これをもって高い操舵性を持ち横流れを回避する。又、**向かい風の帆走の航行能力も向上する**。20世紀に至っても、60年代には中国沿岸では、少なからずの数の沙船が有った。
- 中国古代的戦艦 2016-12-08 由 煮酒君談史 发表于 歴史 <https://kknews.cc/history/jvejr66.html> 訳責丸地
- 歴史を振り返ると、現代の中国の造船業界は世界に遅れをとってるが、古代の中国の造船業界は常に世界をリードしてきた。
 - 余姚市、浙江省の考古学的発見によると、中国の造船業の現在の歴史は7000年以上も続いています。**春秋時代と戦国時代には、造船業はすでに一定の規模を持っていた**。当時、越国家の水軍には特別な造船所、船の宮殿がありました。漢王朝では、州が設立した大規模な造船工場では、様々な種類の軍艦、公用船、航海船を生産することができた。

5帆柱の沙船

- 沙船はまた「四角い船頭・船尾」と言って、船頭・船尾の甲板が広々と高い、船体は深くて小さくて、吃水が浅くて、後部は船尾が水面を出ている。吃水の浅さと四角い船尾が水の抵抗の抵抗力の大きい欠点を補う。その船体が大きいため、より多くの帆柱を設けることができ、より多くの帆で、流れに逆らって舟を航行させることができます。船倉は防水隔壁を採用して客室をあけて、沈没しにくい性能を発揮。多くの貨物を積載、海船と軍艦はこのような船型を用いる。**沙船は殷商時代にその原形が現れ、後世の絶えざる進歩を通じて宋の時に普遍的になり、制作技術が定型化した**。

歴史の海を走る 中国造船技術の航跡 図説中国文化百華



「王宮に行かず、王に面会しなかった」論

- 邪馬台国論を説く研究者の中には、声高に、
 - 「魏の使者は、途中までしか行っていない。」
 - 「女王国に行き会っていれば、こんな中途半端な旅程は書かない。」
 - ✓ この説に同調する説も多い。
 - ☆ ならば、魏の使者が罰せられた記録があるか？
 - ☆ 使節団が目的を達成しない場合は、厳罰に処されるのが通例。
 - 魏と倭国の外交関係と使節の目的を理解すれば、目的地に行かず、目的を達成しないとする説は、意味が無いもの。
- 邪馬台国論者が、魏志倭人伝の邪馬台国への旅程の解明が、うまくできないことから、設問である「邪馬台国への道筋」自体を否定する説
 - 検討にも、聞くにも、値しない説。
 - 自分には、この謎が解けないと分かったなら、「解けない」というべきで、
 - 設問自体を愚弄することは、止めてもらいたいもの。
 - ✓ イソップ童話のキツネの云った「酸っぱい葡萄」と同じこと

運輸・旅程の常識

- 旅程の計画段階で、魏の使節が知るべきこと。

- 概略の行程

- 経由地
 - 距離(経由地間)
 - 所要日数



陸地
浜辺

- 危険度

- 装備・軍備

- 船と陸行

- 船便を使うときの常識

- 船への積み込み・積み下ろしが、海運の最大の問題
 - 現代ではクレーンの設備のあるヤードならば、直接荷揚げ可能
 - 古代～近代：最も人手が掛り、時間と労力を要するコストの高い作業
 - 船倉から人手で甲板に → 舢舨に → 港へ移動 → 舢舨から人手で陸上へ
 - 積み込み・荷揚げは、最小回数（途中で下ろし、再度積み込むことは有りえない。）

- 目的地に一番近い処まで、船で行くこと。

邪馬台国の港

- 魏志倭人に記された港は
 - 邪馬台国の主要な、設備の整った港 → 最大の港
 - 女王の使いが出航する処
 - 外国からの使いが入港する処
 - 良港とは？
 - 防風・防波
 - 貨物の積み下ろしが容易
 - 船舶の入出港が安全
 - 最終消費地に近いこと(地理学では) → 最終目的地に近いこと
- 魏の使者の到達した港は？
 - ✓ 女王国へ最も近い港
 - ✓ 最も経済活動が盛んな地域に隣接していること
- 後背地に人口の多い栄えた地帯がない港は、
 - 地形的に良好なであっても、魏の使者の到着した港では有りえない。
 - 呼子付近、名護屋付近は、後背地に栄えた地域は無く、適切な上陸港では無い。

韓国横断コースは有り得るのか？

□ 帯方郡から韓半島の陸地を行くルートは？

- 韓国内の陸上通行は、危険では？
 - 同6年(245年)郡内の韓族が帯方郡を襲った。これを弓遵と楽浪太守の劉茂が兵を興して討ち、魏軍は韓族を滅亡させたが弓遵は戦死した。
- 狗邪韓国から九州へ渡る船を、
どうやって調達したのか？
 - 韓国に、大規模の使節団を運べる
大型船舶を提供できる国が有った？
- 水行と記述されたものを、陸行とすべき理由が無い。
- 韓国横断コースは、有り得えない。



帯方郡治から邪馬壹国までの全行程図

7：古地図(地形)

遠賀川の地図は 1/2 のサイズ

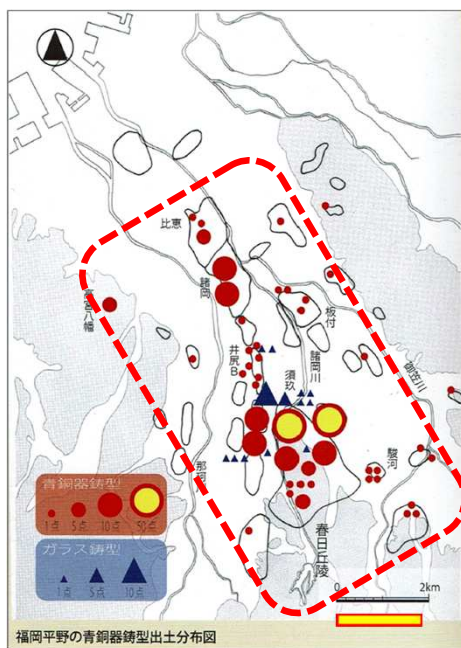
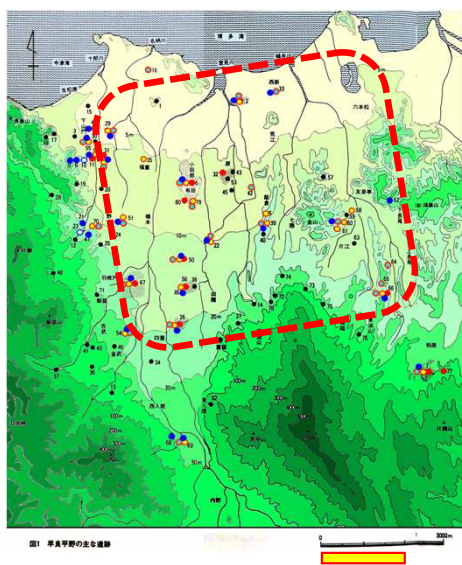


図-5 遠賀川流域の弥生時代の遺跡の分布
(「遺跡位置図/遺跡略年表²²⁾」を元に作成)

博多港 古地図

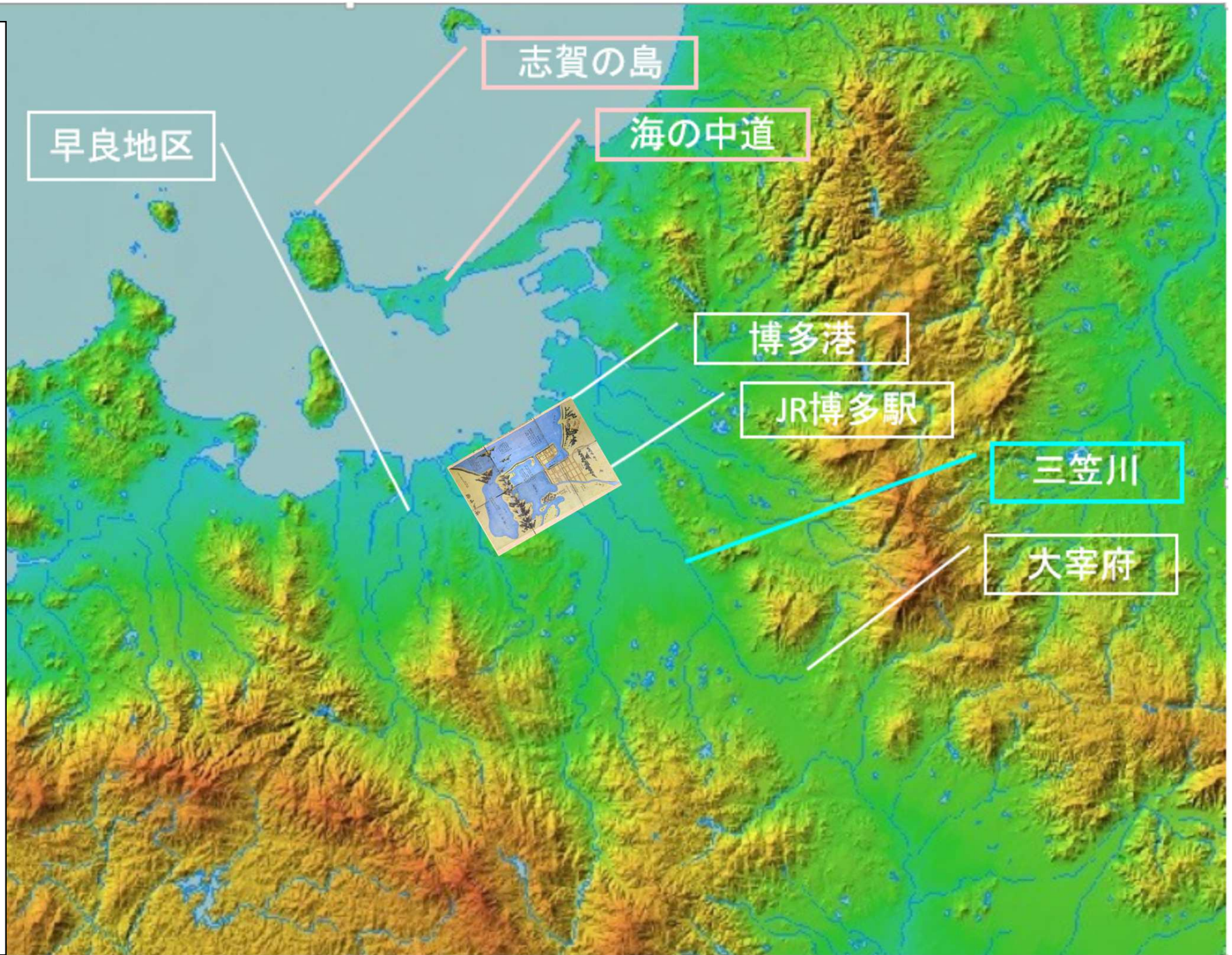
現在の博多湾は、水深5m以下の箇所が多く、浅い海で、浚渫して、大型船の航路を確保している。

博多港は、那乃津・那珂津などと呼ばれ、古代から外国貿易港

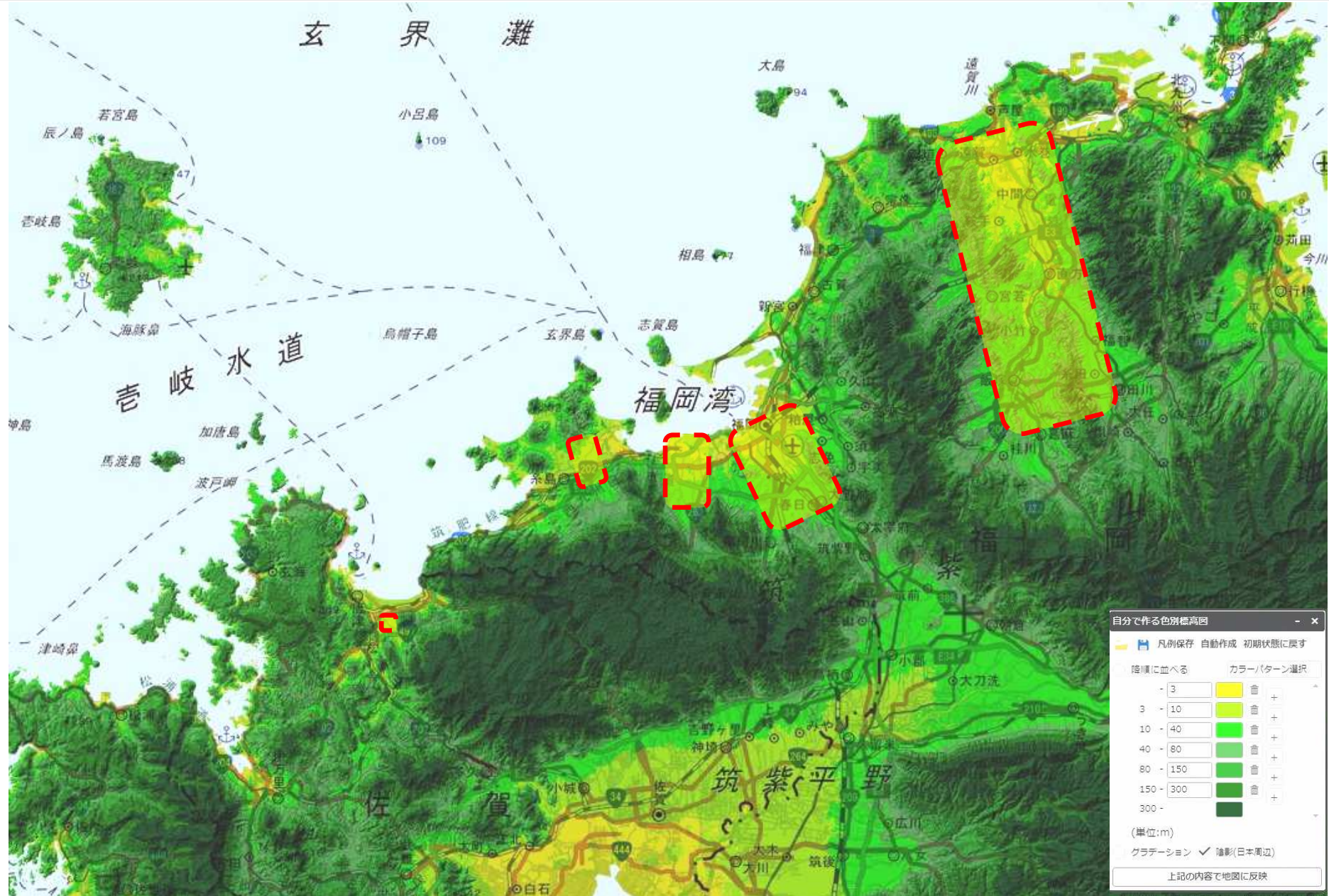
元々は水深も十分あり、古代から、良港として栄えたが、その後、徐々に砂が堆積し、浅くなってきた。

平安時代の末期まで大型帆船の入港可能な良港だった。

博多港の古地図を参照してください。



5.古地図 --現代の地図--



現代の地図で、玄界灘に面した平坦地を確認する。

以上から 旅程を検討する場合に留意すべきこと

1. 使節団の規模は、最低500人～2－3千人。 → この規模の団員が動くことを前提に。
 - ✓ 多くの荷物・人員の移動が可能なコースが必須
 - ✓ 大型帆船が利用されるコース
2. 実行前に、十分な計画が練られたこと。(コース・距離・所要日数など)
 - ✓ 水行・陸行 上陸地点 所要日数・距離 危険度
 - ✓ 旅程は、主要メンバー＝人員数の最も多いグループのもの
3. 魏と倭国の友好関係から、当時もっとも安全・適切なコースをとったと推定。
4. 九州に上陸地点から、最短の陸路で女王国へ到着。(女王国の最も近くの港に上陸)
5. 古代の地形を考慮。
6. AD240年の梯儁一行の残した記録は、AD247年の張政派遣の時に使われ、確認された筈。
(緊急の援軍要請に答えた張政の派遣であったことから、最短コースのはず、
虚偽・作為の有るコースであったとすると、張政の派遣時に、問題が発覚する。)